
クローク

繭墨 あざか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローク

【Nコード】

N 4 5 6 1 W

【作者名】

繭墨 あざか

【あらすじ】

夏の暑い日、ひまわり孤児院に本をよみかせにやって来たおばあさんの話は、とても不思議なファンタジーだった。しかもそれはおばあさんの過去の話だったのだ。時空移動系ダークファンタジーここに開幕…。

B i r t h d a y (前書き)

皆さんはじめまして！繭墨あざかです。

初の執筆ですのでつたない部分もありますが、お暇な時間に読んでやってください。

皆さんを時空の旅へとお連れできれば、幸いです。

B i r t h d a y

くオープニングく

そこは静かな、静寂に包まれた場所だった。

ほのかに薬品の臭いが立ち込める。床には、濡れた人の足跡が続く。追って行くと一人の少女が立っていた。少女の右手首は『001』の数字…。

ここは実験室……

ヒトを造り出す実験室…

『零ノ刻』タイムゼロが始まった場所…。

- - - - -

「クローク」

N o . 0 0 1 B i r t h d a y

2100年 7月23日 夏

真夏の暑い日。ちょうど蝉がなきはじめたころ。

ここ、『ひまわり孤児院』にも、夏休みがやって来た。

毎年、夏休みになると、近所のおばあさんが、子供達に本を読みに来るのが定番だった。

今年もまた、両手いっぱいの本の入った袋を抱えて、おばあさんはやって来た。

「今日はどんなお話が いいかい？」

「今日ね！ 私のお誕生日なの！ だから、特別なお話を聞かせて！」

「そうなのかい？ おめでとう。そうだねえ、じゃあ、おばあちゃんのお話をしよう……。」

「ワイー！ ありがとう！ ミランおばあちゃん！」

「あの日は、今年みたいに暑い夏の日だった……。」

おばあさんは淡々と話し始めた……。

- - - - -

2035年 8月11日 夏

大雨の降り続く真夏の暑い日。私達は「仕事」の為、イギリスに来ていた。

私達はディーバ。特定の遺伝子を持った子供達を選ばれる聖職者だ。あらゆる怪奇現象を「式神」によって解決していくのが、私達の仕事だ。

イギリスでの怪奇現象。それは、ロンドンで起きた。

「犯人不明の殺人事件？ そんなもん警察に任せればいいじゃん。何で私らがやらなきゃなんないんだよ！」

「それがただの殺人事件じゃ無いんだよ、ミラン。殺された遺体が次々に生きてる人々を襲うってのはなしだよ？」

「げええ〜きもち悪っ！ ゾンビじゃん……。」

死んだはずの人間が動きだして人々を襲う。

どこかのホラー映画のような話した。そんなわけない。ミランはまるで馬鹿にしていた。

「ロンドン警察もお手上げ状態なんだよ。だから僕達が呼ばれたって訳……って聞いてる??」

「あつごめん。でもさ、イアン、あそこ見て。こんな雨降ってるのに、誰か座り込んでる……。」

「本当だ。どうしたんだろ……。」

そこには、黒いフード付きのコートを真深にかぶった、一人の少女がいた。屋根の下に座ってはいるが、この大雨のなかだ、すでにビショビショだった。

「おー……い……! なにやってんだあー!」

「なっちょっミラン! 話しかけちゃダメだよ。向こうがびっくりしちゃうだろ?」

案の定、驚いたのか立ち上がり、目を丸くしてこちらを見ている。

「ええ〜と、何してるの? 濡れるぞ?」

「……………」

「あのお……………」

少女の足元には、一匹の三毛猫がいた。その猫も雨で濡れている。この少女にとっても懐いているようだ。

「ダレ? ……なぜここに来タの? ……」

「私らは、とある依頼を受けてきたんだよ。」

「そう……………」

町人としては、そっけない態度。それに言葉も片言だ。この町の間ではないのだろうか?

30秒ほどの沈黙が続いたあと不意に少女は三毛猫を抱いて立ち上がり、何も言わずどこかへ去ってしまった。

「あつちよつと待って！！ 話を！！ 聞かせ…行っちゃった……。」

「いいじゃん！ほつとけば！」

その時、イアンは何か光る物が落ちている事に気がついた。

「！ん？？ 鍵型のネックレス？？ あの子のかな？」

銀のような素材で出来ているが、それは汚れて黒ずんでいた。

「これ。届けてあげないと……。」

「はあ？ めんどくせ……。」

「いいじゃないか。彼女に話しも聞きたいし。」

「わかったよ……。」

彼女の物だと思われる落とし物を片手に、イアン達は、少女を探し始めた。

まずは家々が並ぶ住宅街、そして店が並ぶ商店街……。

と町をまわっていくうちに、イアン達はあることに気がついた。

「なあ、イアン。思ったんだけど、まあまあデカイ町にしては静か過ぎないか??」

「そつえばそうだね…。いくら怪奇事件が起こっているにしても、人が居なさすぎる……。」

「まさか全滅とか??」

「その線もありえるけど…じゃあ何故あの娘だけ？」

「まさか！ あいつが犯人とか!？」

「あの娘が??」

人気の無い町にたった一人残っている少女。確かに彼女が黒だという可能性もあるだろう。しかも言葉も片言で疑う予知はありそうだ。

「もし、そうなら急いで捜す必要がある！　もしかしたら、まだ残っている人達を襲うかもしれないねえ！」

「そう事を急がないでよミラン！」

「でも！！」

「わかった…急ごう……。」

「あと、どこ捜してない？」

「あとは、郊外だけだよ。」

「よし。捜してみよう！」

あらかじめ町の構造を調査済みだったイアン達はこの町の郊外にある森へ向かうことにした。

鬱蒼とした森の中を歩いていく。人の手が行き届いていないのか、草木は生え放題で雨が降っていることもあり、辺りは薄暗かった。

「歩きにくいね……。」

「ああ。それにしてもここはどこなんだ？」

「それほど歩いていないつもりだけど。かなり奥まできたような錯覚がする……。」

「気をつけよう……。」

「うん……。」

薄暗い森の中だ。何かあるかわからない。細心の注意をはかり、奥へと進んでいく。

すると、あるものを見つけた。

「ねえミラン！　あそこ見て！　掻き分けたみたいなお道が出来てる

！
」

「！ 怪しい臭いがぶんぶんするな……。…」

「行ってみよう……。…」

そこには、左右に掻き分けられた小道が出来ていた。動物の通り道だろうとも思ったが、あまりにも人工的過ぎる雰囲気は怪しさを覚えたと。

いつでも反応出来るように、戦闘姿勢をとりながら進んでいく。すると、人の声が聞こえてきた。先頭をあるくミランが右手を上げ、待てと示した。

「?? なんだ？」

「唄じゃないかな??」

それは、唄だった。あまりの美しさに立ち尽くしてしまう。

「
十_二」
十_三」

そこに彼女は居た。ちよつとしたスペースのある空間にボロボロのマリア像が立っている。彼女はそのマリア像に向かって祈る様に歌っていた。

「唄?? でもなにいつてるか分からない……。…」

「ラテン語じゃないかな? すごく綺麗なうたこえだね……。…」

キシッ

イアンの足元の枝が折れた音がした。

「おい！ なにやってんだよ！」

「ごっごめん!!」

ミランが小声で叱責するが、案の定気づかれてしまった。驚いた様子で少女がこちらを振り返った。

「ダれ!!? ……」

!!!!!!!!!!

やばい…気づかれてしまった。ミランが息を飲んだとき、慌ててイアンがフォローする。

「! あっええ〜と、ごめんなさい! 立ち聞きするつもりは無かったんだけど、綺麗な歌声だったからつい……。」
「あなタ…達…さつきノ……。」

それからイアン達は、この町で怪奇事件が起きていること。そして自分達はそれを解決する存在であることを話した。

「…と、いう事なんです。」

「そう……。」

「そう。って何か知らないのかよ?」

「……。」

首を左右に少しだけ振って彼女はNOと答えた。

「それと、一つ気になる事があるのですが……。」

「ナに?」

「この町には他に人は居ないんですか?? 住宅街や商店街などを周りましたが、他に人を見かけなかったんです。」

「人どころか、鳥や野良猫、動物さえ見なかった。」「見たっけいうなら、本当にあなたとその猫ぐらいで……。」

少女は俯いて黙りこんでしまった。
再び沈黙が訪れると思われたとき、少女が口を開いた。

「……確か二……この町にハ……ワタシしか居ナイ……。」

「どっとうしてですか!？」

「……皆ヲ……町外れノ教会に……避難させた……。」

「という事は生存者もっ!」

イアンが立ち上がり、驚きの声を上げたとき、ミランが気づいた。

「しっ! 静かに。何か来るっ……!」

話しこんでいたせいか、何かが近づいて来る気配に気づかなかった。
カサツという音がする。

何かがゆっくりと、しかし確実に近付いてくる気配がした。
いつでも戦えるように戦闘体制を整える。

イアンとミランの背中で少女を挟んで護る。

「あなたは動かないで、僕らの間で、じっとしてて下さい!」

「何がくるかわからない。イアンっ!! 準備は?」

「いつでもっ! ……」

3人の間に緊張がはしった時、先に動いたのは、相手でもなくイアン達でもなかった。

イアンとミランの背中の中で突如光が輝いた。

「えっ!? ……」

「なっ!? ……」

そこには、燃えるような真っ赤の鬣を持った、一頭のライオンが現れた。

一体何が起きたのか??

そうイアン達が思った時、少女がおもむろにつぶやいた。

「……××××……『ファイアドラゴン』……。」

体長2?はあるだろう。

ファイアドラゴンと呼ばれたライオンはその口を大きく開けて、灼熱の炎を吐き出した。

その炎は一吹きで辺りを焼き尽くした。

「すっすごい……!」

「なっなんだよ!? これ……。」

イアンとミランが驚きの声を上げたとき、どうしたことが、そのライオンは炎に包まれたと思ったら、小さな三毛猫に姿を変えてしまった。どうやら弱っているようだ。弱々しくその場に倒れてしまった。

「なっ!?! どうしたんだ!?!」

「おい!! 猫! しっかりしろよ!?!」

猫の心配をしている場合ではなかった。

猫が倒れたと思ったら、イアン達の背後で今度は少女が倒れてしまった。

「だっ大丈夫ですか!?!」「おいおい。一体どうしたっていうんだよ……。」

何が起こったのか状況が理解できない。混乱しそうになったその時だった。ライオンの炎によって焼き殺された敵の中に動ける者がいた。それに気づかなかった二人は少女の体を気遣う。

「あのっ！！ 大丈夫ですか！？」

「おい！ おきろよ！」

必死に少女に呼び掛けていたとき、ミランが何者かの存在に気づいた。

しかし、気づいたのが遅すぎた。それはもう、イアンの背後すぐそこまで迫っていた。不運なことに、呼び掛けに必死なイアンは気づいていない。

「っ！！ イアンっ！！ 後ろっ！！！！」

「え！？ ……」

雄一月明かりが照らすその場所に鮮明な赤色が目に入った。ミランの目の前を真っ赤に染める。

「！！！！！！！！」

「っっっ！！」

「イアンっ！！！！！！」

その赤色の元はイアンだった。

イアンはその場に倒れ込んでしまった。イアンが地面に倒れ込んでしまう前に、ミランがその体を支える。

「っ…ミ…ラン…っ」

「イアンっ！」

すると、イアンの背中中で隠れていた敵が、その姿を現す。

それは、体長2？ほどの生物だった。

人間のように人間ではない。人間のなり損ないのようだった。元は人間だったのだろう。

しかし、その右手が大きく歪み、刃物、強いて言えば、鎌のような形をしていた。

頭部と思われる部分に付いている大きな目が、こちらをギョロリと睨んだ。

「っ！ ちくしょう！！ てめえ！！ ぶつ殺す！！」

女とは思えない台詞を吐いたミランは自らの「式神」を呼び出した。

「こいよ！！ ブルーバード！！」

その瞬間、ミランの胸の辺りが蒼い炎に包まれた。

そこに現れたのは全長3？はあるフェニックスだった。

「いけよ！！」

フェニックスが勢いよく飛び上がる。そしてその翼を広げた。

端から端まで軽く5？はありそうだ。さらに大きく羽ばたくと絶対零度の風をつむ。

「零度ノ炎！！！！」

絶対零度の炎の風が残っていた敵を焼き付くした。辺り一面が昼間のように明るくなる。

「ハア… ハア… ハア…」

式神の扱いには、精神力が必要だ。怒りに任せて、敵の割には大技をだしてしまった。相当の体力消費だ。

ミランが息を切らしていると、上空から降りてきたフェニックスが、蒼い炎に包まれる。するとフェニックスは一人の少女へと姿を変えた。

「もー。ミランに指示されたからやったけど、あんな大技使ったら、精神力が持たないわよ？ 敵もたいしたことないのに……。」

「わかって……るよ……。ちょこちょこ攻撃するのがめんどかったんだ。」

「とりあえず二人を本部まで届けましょう。私の背中に乗れば2時間着く。」

「ああ。」

ミランの式神、彼女はジェシカと呼んでいる。

一行は、ジェシカの背中についていくことになった。しかし……。

「イアン大丈夫か？ 立てるか？ なぁイアン？ 聞いてる？ ！ おい！！ イアン！ どうした！？ 」

「イアン君！？ 」

イアンの意識がなかった。さっきまで座り込んでいたと思ったら、すでに遅かった。

「ちくしょう！ ジェシカ！！ 」

「わかった！！！！ 」

一刻を争う状況だ。

ジェシカが蒼い炎に包まれる。巨大なフェニックスへと姿を変えた。

「あいつも、本部へ連れてってやんねえと！」

ミランは少女へと目をとめた。ファイアドラゴンと呼ばれたライオンがでてきてから、ずっと意識がなかった。

「こりやマズイ！！ 二人を絶対助けねえと！！」

まずは重傷のイアンを背負い、ジェシカの背中に乗せる。そして少女を、しかし弱々しく座り込んでいた少女の三毛猫はすでにピンピンしていた。

「おい！ 猫！！ お前も早く乗れ！！ ご主人と一緒に来たいならな！」

「ニャー！！」

三毛猫がミランの肩に飛び乗った。

すると辺りは旋風に包まれる。翼を大きく羽ばたかせ、ジェシカが飛び立とうとしている。

「ジェシカいけ！！」

ミランの声と共に、ジェシカは飛び立ち、彼らは本部を目指した……。

s t a r t

「クローク」

N o . 0 0 2

s t a r t

本部に到着した後、イアンが目を覚めたのは、三日後のことだった。

背中の傷は完全に癒えてはいないが、会話を出来るまでに回復していた。

そして真っ先にお見舞いに行ったのは、彼女だ。

「よっイアン。体の調子はどうだ？」

「良くは無いけど、大分楽だよ。ありがとう。心配してくれて。」

「なっなんだよ！ 改まって！」

突然のイアンの感謝の言葉に照れてしまった。

いわゆる、ツンデレというやつだ。ちょっと突き放し過ぎたか？

心のどこかで少し後悔したミランだったが、さすがイアンだ、そんな彼女の気持ちをよくわかっている。

「まったくも。本当にミランは素直じゃ無いんだから、僕の感謝の気持ち、受け取ってよね。」

「わっわかったよ！ どーいたしまして！／／」

クスッと笑いあった二人の間に、もう一人、お見舞いに来た者がいた。

部屋にノックの音が響く。

「失礼します……。」

入って来たのは、あの任務で出会った少女だった。ミランの話によると、ここ『ディーバ研究所本部』に着いたあとすぐに、目を覚ましたらしい。一時的な疲労だったので大事には至らなかったという。

「あつあなたは!!」

「そうだ。あの時会った子だ。あれからいろいろ調べさせてもらってな。身元がわかったんだ。」

「イーラ・アイリスと言イマス…よろしくお願いします……。」
「と言う訳だ。」

少女の名前はイーラ・アイリス。
しっかりと言葉も話している。体の心配はなさそうだ。

「大丈夫なんですか?わざわざありがとうございます。」

「大丈夫……。」

相変わらず素っ気ない態度だったが、彼女なりに、イアンにも感謝の気持ちを伝えているのだろう。少し顔が染まっていると思ったのはどうやら錯覚ではないらしい。

「それともうひとつ……重要な事が分かった。」

「なっなに……??」

真剣な面持ちで口を開いたミランに、緊張気味のイアンが問い掛ける。

「実は、イーラはディーバだったんだ。一緒にいた三毛猫が彼女の式神だった。」

「そうなんですか!?! つ……痛てっ……!!」

「だっ大丈夫か！？　いきなり大きい声出すなって！」

あまりの驚きについ大きな声を出してしまい、背中に響いてしまった。

涙目になりながらも、イアンは話しを続けるよう促す。

「っ・・・大丈夫っ。詳しく聞かせて。」

「ああ・・・。アヤ博士の調べによると、イーラの式神は炎を司る式神だ。私らはまだ彼女の式神のようなタイプを経験していないから重要な戦力になるってさ。」

「で、その張本人は??」

「あの時、力の使い過ぎで今はイーラの中で眠ってる。じきに目を覚ますさ。」

「そうなんだ……。」

イアンは少々ガツカリとした様子だ。

「式神ってナニ？」

「えっ？しらねえのかよ!？」

「それはね……。」

出番が来たと言わんばかりに、イアンは説明を始めた。

式神というのは、その元になっていた魂がこの世の生物に移り具現化したものをさしている。

時には動物、植物にも魂を宿らせることができる。しかし、何故か人間に宿る事は出来ないという。

そしてその式神を操ることの出来る人間を我々は『ディーバ』と読んでいます。ディーバはある特定の遺伝子を持った者だけが成りうるとされており、女性が多いのだという。

しかし、式神とディーバ、この二つのものが現れたことで、世界に大きな歪み（ひずみ）を生んだ。その歪みを悪用する者が現れ、それを防ぐために我々は戦っている。

この一連の説明を怪我人とは思えぬ口調でイアンは話した。

「本当イアンは式神ヲタだよな。」

「ちつ違うよ！ 自分達の式神のことをよく知っておいた方が、戦いやすいだろ？？それにイーラさんの式神に早く会って見たかったんだ。」

なんとか取り繕ってはいるが、実際イアンは式神ヲタだった。

しかしイアンの式神に対する知識は役立つ面も多かったのだが、博識故にみんなに頼られるイアンをミランは羨ましくも思っていた。

「ミランももっと勉強して、式神のことやディーバについて学べばいいじゃないか。なんなら、図書室への入室権を与えてもいいけど？」

「けっ！ あんなどころの入室権なんていらねえよ！」

ここディーバ研究所本部は、『本部』と名のつく事もあって、重要な部屋が多い。そのため、各部屋に『室長』という者が存在している。

イアンは図書室と資料庫、そして武器庫、他32の部屋の室長であり、部屋に立ち入ることのできる権利が与えられている。

無論、室長が許可をすれば誰でも入室が可能になる。

「あの・・・ワタシに図書室へノ入室を、キヨカしてくれませんか力…………？」

「えっ？ イーラさんが？」「すみません・・・無理ナラいいんで

すケド……」

「いえ！ 大丈夫ですよ！ 許可します！」

「おいおいイーラ、あんなところのどこがいいんだ？ 訳のわかんねえ分厚い本が並んでるだけなのに……」

「ワタシも、式神について学びたいんで……。」

「ハア……。」

ミランが呆れていると、部屋にノックの音が響いた。

「はい？」

入って来たのは、白衣を身に纏った一人の女性だった。まだ若い。スタイルもいいし顔立ちも綺麗だ。しかしそんなことお構いなしとでも言うように、黒ぶちのメガネをかけている。せつかくの美人が台なしだ。おまけに髪もあまり整えられていない。白衣だって染みだらけだった。もっと女性らしい格好をすればいいのに……とイアンは思っていた。

「あら？ あなた達？ 仲が良さそうね？」

「アヤ博士。研究はどうしたんですか？」

「今は休憩中よ。」

「またかよ……。」

「ミラン何か言った？」

「なんでもないです……。」

彼女は研究所の博士だ。式神やデীবアについての研究を主に行っているが、研究に息詰まると『休憩中』と言って抜け出してくることが多々あった。

「イアン。体の調子は？」

「はい。大丈夫です。まだ立てませんけど……。」

「無理しないでね。あなたにはまだまだやってほしいことがたくさんあるんだから。」

「はい。がんばります。」

「それと……。たしかあなた……イーラさんだったわよね？」

「はい。」

「ようこそ我が研究所へ。」

アヤは両手を広げて歓迎した。

「あなたには、説明すべきことが沢山あるわね……。」「イーラさんに図書室への入室を許可しました。そこで学べることも多いと思います。」

「あら。じゃあそうしましょう！ ミランよろしく。」

アヤは満面の笑みをミランに向けたがその表情には『やってくれるわね？』と脅しとめとれる何かが含まれていた。

勿論、即答でミランはokをする。

「はっはい！ わかった……。」

気の強いミランが言い負かされている。それだけの圧力がアヤにはあった。

「んじゃ、図書室行くか……。」

図書室はこの医務室を出て左に曲がり、突き当たりを右に曲がったら、階段を昇ってさらに左に曲がって……。

とにかく本部は広すぎる。ここを知らない人は、図書室へ行くだけで半日かかりそうだ。

しかし、ミランはこの本部の入り組んだ造りを全て把握している。噂によれば、本部に配属された新米ディーバの最初の任務はこの本部の間取りを全て頭に入れる事から始まるのだとか…。

頭に入れると言っても容易ではない。本部にある部屋の数は、立入禁止の部屋を除いても327部屋あり、全部合わせると、340部屋はあるのではないだろうか？

そういえば、自分もここに配属されたとき、馬鹿細かい本部の見取り図を見せられ、アヤ博士に笑顔で『覚えなさい。』と言われて苦勞したな。とミランが思い出を振り返っているうちに図書室に到着した。

目の前には大きな寂れた扉があり、『Books Hall』と書かれている。

「ここだ。扉は寂れてるけど、中は違う。まさにホールって感じだな。」

「どうやって入ルノ？」

イーラが疑問に思ったのは、この扉にドアノブが見つからなかった事だ。

押して開けるのかとも思ったがどうやら違うようだ。

「ここに、紋様が書かれてるだろ？ここに、式神のエネルギーを込めるんだ。」

そこには、龍のような紋様が描かれていた。

「込める？」

「左手をあててみる。」

イーラは紋様に左手をあて、目を閉じた。

すると、紋様の輪郭が赤く光り、弱い炎をあげた。

「やっぱりイーラの式神は炎を司ってるんだな。」

ミランがそうつぶやいた途端、イーラの体がどんどん薄くなっ
ていき、やがて消えた。

図書室へと入ったのだ。

「え・・・？」

イーラが困惑していると、続いてミランが現れた。

「これで、わかったか？ 本部にある全ての部屋はこうやって、
式神の力を使って入るんだ。」

ミランがしたり顔で、説明していたが、イーラにはもうひとつ、
驚きがあった。

それは、ここの広さだ。ミランが『まさにホール』と言った意味が
わかった気がした。

「すごい……………！」

天井は高く、左右には天井まで届きそうな本棚があり、分厚い本が
ギッシリと並んでいる。

その本棚と本棚の間に木製のはしごが架かっており、2階へ続い
ていた。

さらに前を見ると、どこまで続いているかわからないほど、奥行き
があった。

そして、数々の机が並べられており、白衣を着た、アヤの部下であ
ろう研究者達が、黙々と作業をしていた。

その中に一際目を引く、背の高い金髪の青年がいた。ミランがその彼に向かって親しげに手を振った。

「おお！ こんなところでなにやってんだよ？」

「何って、研究だよ。」

「今は、私達のディーバ化について研究しているんです。」

「また、めんどくさそうなことやってるな……。」「ところで、そちらのレディーは？ 見かけない顔だが……。」

金髪の青年はイーラを見つめながらそう言った。

「本当、女に対すると鋭いよな。」

ミランの言う通り、彼は女性の事になると、異様に鋭くなる。女ッ垂らしてやつですね。

「こいつは、3日前新しく本部に配属された、イーラだ。」

「イーラ・アイリスです……。」

「俺はカイル・レイン。よろしくな。」

「私は、セオ・リャンと言います。よろしく。」

カイルに続いて自己紹介をしたのは、背の少し低い、ショートヘアの日系中国女性だった。

内巻きにウェーブがかった髪がなんともかわいらしい。

「よろしくおねがいします……。」

「ちょうどいい！ セオ達にも……。」

「却下だ。」

「却下です。」

二人揃って即答で断られた。

「は！？　なんでだよ！？」　「言ったでしょう。私達は今、デীব化について研究しているんです。ミランさんのお仕事なんだから自分でやってください。」

「ちつ……………」

セオに正論をぶつけられたミランは仕方なく、『イーラに物事を教える』仕事をすることにした。

「お前、頭こは良いんだからもっと使えよ……………」

カイルがミランの頭をツンツンしながら言った。実を言えば、ミランもそれなりに、頭は回る方だ。イアンほどには及ばないが…。

「はあ…………んじゃ、ジェシカにでも、手伝ってもらつか……………」

そう言ってミランはジェシカを呼び出した。ミランの胸元が蒼い光りを帯びる。そしてその蒼い光は、一人の少女へと姿を変えた。

「こんな事だろうとは思っただけど…………ま、手伝っつわ。」

「やっぱ、頼るべきは自らの式神だな！」

ジェシカの肩をミランはポンツと叩き、イーラを連れて図書室への奥へと消えて行った。

その頃、とある実験室では、着々と実験が行われていた。勿論、ごく一部の者しか入ることの出来ない、『関係者以外立入禁止』の部屋だ

その部屋に二人の人間が入ってきた。薄暗い実験室の中に機械的な

明かりが灯る。パソコンを開いているようだ。キーボードを打つ音が響く。そして人間は唐突にこんな事を言った。

「いよいよ、始まりの鐘が鳴る……………」

「アレはちゃんと動くでしょうか？」

「動いてもらわなければ困る……………」

「それもそうですね。」

「万が一失敗しても、予備はいくらでもいる……………」

そして人間が前を見上げるとそこには、見覚えのある、浴槽のようなものがあつた。

中にはヒトが入っているようだ。実験途中なのか、その浴槽は、透明な蓋のようなもので固く閉じられている。蓋には『No.002』……………。

同じ物が右側へといくつか続いている。右へ行くほど、数字が増えているようだ。そして中に入っているヒトは小さくなっているようだ。

それは、母体の胎児を連想させた。まるで成長過程のようだ。

右隣りにも一つだけ浴槽があつたが蓋が空いている。液体も張られていない。ヒトも入っていないかつた。

空いているその蓋には…………『No.001』と書かれていた。

どうやら、ヒトは繭の中から脱皮し、蝶になったようだ……………。

初任務

「クローク」

No.003 初任務

今ミラン達がいるのは、図書室内にある個室だ。あの後カイル達と別れて今はイーラに様々な事を教えているところだ。

「いいか？ よく聞けよ。まず、この世界の成り立ちについて説明する。」

「はい。」

約30年前。世界に異変が現れたのはこのころからだ。

元々、式神やディーバなど、世界には存在しなかった。

しかし、原因不明のエネルギー反応が、ヨーロッパを中心に発生。道を歩いていた泥酔した男性が、言葉を喋る犬をみたという情報が入る。

しかし、単なる酔っ払いのうわ言だろう。と処理されていたが、その後アメリカを中心に『言葉を話す』という情報が多数発生した。

「これが、私達の始まりよ。」

「そーいやー、ジェシカはどこから来たんだ？」

「そんなの覚えてないわ。」

「ライも、突然ワタシのまえに、あらワレた。」

「ライ？ お前の式神の事か？」

「そう……。」

どうやら式神は、ディーバと成りうる者の側に突然現れるようだ。

「式神が突然ディーバの元に現れるのは、ディーバ本人の細胞の突然変異が原因よ。これもヨーロッパで起きたエネルギー反応が原因とされているの。」

突如その場に、アヤの声が響く。

「あつアヤ博士!？」

「どうして？」

「あなた達だけじゃ、知識不足だと思つてね。」

そう言つてアヤは引き続き話し始めた。

「そして、その細胞突然変異には、エネルギー反応があつた……。」

「あつ分かつた! 何かで、そのエネルギー反応が、最初に観測されたエネルギー反応と似ていた事が分かつたんだよね？」

「そうよ。」

そして現世界は変異を始めた。

時間にズレが生じたのだ。

最初の事件は日本。

三日間旅行に行つていた一人の女性が家に帰宅したとき、家族に『どこに行つていたのか? 心配した。』と言われたことから始まつた。勿論、家族に無断で旅行に行つていた訳ではない。

娘と夫は快く、送り出してくれていた。そして女性が旅行へ出掛けたのは、日本時間で8月の1日〜3日。しかし女性が日本に帰つてきたのはなんと一ヶ月前に戻つた7月の上旬だった。

「その後、この女性の話しによれば、家族が自分は6月の中旬から約半月間行方不明だったら事を聞かされたらしいわ。」

「つまり……。8月に旅行へ、しかし帰宅が7月になった。6月から行方不明……。」

「という訳ね。」

「そうよ。時間が逆回転したって事。」

「原因は？」

そう。この事件の原因だ。なんとそれは人為的な物だった。

「私達は、この時間の歪みを『ヒズミ』と呼んでいるわ。このヒズミを悪用した者が居た……。」

「それが、『アンリアル』」

「直訳で『非現実』……。」

彼らはその時間のヒズミに干渉出来る何らかの技術を持っているらしい。

「奴らの悪行を止めるのが、私達の仕事って訳だ。」「ワタシと会ったトキの事件は？」

「あれは、死んだ者自体の時間を巻き戻した事でおきた怪奇よ。」

「調査の結果、奴らの体に突然変異が見つかった。だから容姿が醜かったんだ。」

時間は操る事は出来ても、人間そのものの時間を操る事は出来ない……。そのためあのような形が出来上がってしまったのだろう。

「奴らは、死体を集めて実験をしていたんだと思うわ。自分達の技術で、ヒトの時間を操れるのか……。」

その結果があれだ。失敗したのだろう。

「調査の結果と肉片サンプルを調べたら、あれは、式神によって肉
体改造されていた人間だったことが分かったわ。」

「式神のタイプは？」

「ズバリ、・・・解らないわ。」

「やっぱり……。」

「でもきつとあれば、この世に存在ならざるものね。」

アンリアル達が使用している式神は、この世界に存在しないものだ。

「式神ノ、タイプ??」

「ええ。確認されているタイプだけでも、8タイプあるわ。」

「その中でも、大きく5つに分けられるんだ。」

「イアン君のウェンディのような、自然を司る式神。私のような、
氷結を司る式神。貴女のライのように、炎を司る式神。」

「そして、セオのように水を司る式神。」

「私は科学者だけど、一応ディーバなのよ。」

「そういや、アヤ博士の式は何タイプなんだ？」

「私のは、雷を司る式神よ。」

『炎』『水』『氷結』『自然』そして『雷』

大きく分ければ、この五つだ。

「そしてその中でも珍しいタイプがあるわ。今は、日本にいるけど、
そのうちイーラとも会うことになるわね。あら、もうこんな時間？
皆に怒られるといけないから、私はそろそろ戻るわね。」

「ああ。サンキューな。」

「いえいえ……。」

一通りの説明を終えた後、アヤは研究室へと戻っていった。

「今、アヤ博士八何ヲ研究してるノ？」

突然、イーラはこんな疑問を覚えた。

質問に答えようとするミランの顔が、少し曇った。

「実は余り知られてないんだがな……。博士は今人工的にディーバを造り出す実験をしてるんだ。過去に、ミスがあつて人が死んでるって話だけど。」

「そうナンダ……。」

「今の話、他で言うなよ。公になるとちよつと厄介だから。」

「うん。分かつタ……。」

少し場の空気が凍ったが、すぐに平常に戻った。イーラが何故突然、あんな質問をしたのか、ミランは不思議に思い、逆に聞こうとしたが、その声は『緊急召集放送』のアナウンスによって掻き消された。

「それにしても、どうし……。」

『緊急召集！緊急召集！ディーバの皆さんは、至急、「DIVE」に集合して下さい！繰り返し……。ザー・ピッ……。集……。緊急……。』

電波状態が悪いのか、ときれときれ、ノイズが混じり、繰り返しのアナウンスが聞き取れなかった。しかし、とにかく集まれという事だろう。

「なっなんだ！？ 緊急召集だと？」

「なニ??？」

「わかんねえ！とにかくついて来い！」

ミランはそう言うと、個室を飛び出していった。イーラは慌てて後

を追う。

図書館のなかを駆け抜け、出口を出たとき、ようやくミランは状況を把握した。

「そうか！」

「どうシタの？」

「私達の出番だ！」

「え？」

「『ヒズミ』が現れたんだ。時空の歪みが！」

ミランは入り組んだ通路を走りながらイーラに説明する。

「さっき話した通り、『ヒズミ』が現れた。アンリアルが現れたって事だ。奴らは、私達と同じ力を持つてるから、私らしか戦えない。だから緊急召集されたんだ！」

そう説明している間にあっという間に緊急召集場所に到着した。

そこは、数々のシステムがあり、まるで近未来都市のような場所だ。非常に広く、戦闘機が5、6機はすっぽり収まるだろう。

そのホールの奥に、『D I V E』と呼称される物があった。

「あれは？」

「時間がねえから簡単に説明するぜ。今から私らは『ヒズミ』の中に行くことになる。」

「『ヒズミ』の中？」

「だから・・・時間がねえ、説明は後だ！今は黙ってついて来い！」

「それは駄目よ。」

ミランの声を遮ったのはアヤだ。

「たいした知識もないまま『ヒズミ』に行くのは危険だわ。イーラはすぐ後に行かせるから、あなたは先に。」

「分かった。じゃあイーラ後でな！」

そう言っでミランは『D I V E』の元へ走った。

『D I V E』とはそのままの意味で『ヒズミ』なある空間へ飛ぶ、つまり、ワープのような物だ。

「『ヒズミ』はどこに出来ているのか解らないの。過去かもしれないし、未来かもしれない。そこがどんな所かも、解らない……」
「ひょっとしたら、アンリアル達の罠かもしれないねえしな。」

二人の会話に入っで来たのは、カイルだった。

「だから、少しでも安全を期すために、これを着て行きな、お嬢ちゃん。」

カイルに手渡されたのは、一着のコートだった。
しっかりとした生地で作られている。

コートのあちこちに仕掛けが施してある。長袖の袖部分には、チャックがあり、おまけにフード付きでサイズもピッタリだ。

「少しは防御になると思うわ、だから長袖は暑いかもしれないけど、我慢してちょうだい。」

「はい。大丈夫です。」

「いきなり戦場に行くなんて、お嬢ちゃんも運がねえな。」

「しょうがないわ。初めてだからと言って、我が儘も言っでられないでしょ？」

「ワタシ、頑張りマス。」

「そうね……。さ、時間がないわ。」

そう言つて、アヤは出発を促す。

イーラは『DIVE』の元へと向かった。

近くで見ると、かなり大型だ。それは、カプセルのようになっており、蓋が空いている。そこには、コックピットのような座席があった。

「そこに座つて、目を閉じるだけでいいわ。後は、こちらでやるから。」

「はい。」

イーラはコックピットのような座席に座った。

カプセルの蓋が閉じられる。すると、外部からの音が完全に遮断された。

イーラが目を閉じると、通信でのアヤの声が響いた。

「イーラ。準備はいい？」

「はい。」

イーラが返事をする、何やら機会音が聞こえた。そして、アヤの声。

何を言っているのかわからないが、その声は次第に遠退いて行き、やがて聞こえなくなった。

気がつくと、イーラは立っていた。

目前を見たが、何もない、ただ広い空間だけが広がっている。

イーラはただ、前へと歩くしかなかった。

前と言つても、方向が全くわからない。今自分が向いている方向へ

歩くだけだった。

しばらく歩いて、状況は変わらなかった。

「ここハ・・・一体どこ？」

誰もが思つてあるう疑問を口にしたとき、ミランの聲が、聞こえた気がした。

「ミラン??」

「・・・ラ・・・イー・・・ラ……」

「ミラン? ミラン!!」

やはり自分と呼ぶ声だ。

しかしはつきり聞こえない?

遠すぎるのか?と思ったとき。唐突に、ミランの聲がはつきり聞こえた。

「イーラ! イーラ! おい!」

気がつくと、イーラは自分が倒れていたことに気が付いた。目を開けると、心配そうに覗き込むミランの顔があった。

「イーラ! 大丈夫か?」

「うん・・・。何があつたの?」

「多分、うまく飛べなかつたんだ。」

「飛べなかつた?」

「ああ。『DIVE』は、飛ぶ人の精神状態が悪くないと、上手く飛べない事があるんだ。初めてだったから、余計にだと思っけど。」

イーラは立ち上がり、辺りを見回した。

「大丈夫か？」

「うん。」

そこは、町だった。しかし何かがおかしい。

「ここが、『ヒズミ』の中だ。」

「ここが……。」

そこは、静寂に包まれた場所だった。辺り一面白黒の世界。

「『ヒズミ』の中は、現世界と繋がってるんだ。鏡みたいに。」

「鏡ノ・・・世界……。」

「今はいつだ？」

そう言って、ミランは何やら、携帯端末を操作し始めた。

「それ、何？」

「これか？ これは、アヤ博士達と通信ができるんだ。今、私らが居る場所と時間は来てみて初めて判るからな。」

ピッピッとボタンのプッシュ音が響く。

「博士。聞こえるか？」

「そんなに大きな声出さなくても聞こえてるわよ。」「ここはどこだ？」

「そこは日本よ。」

「日本？」

どうやらここは日本らしい。

一面白黒の世界の真ん中に一軒の2階建ての家が目を書く。

「今回のヒズミの出所は、その家よ、中に入っているいろいろ調べてちょうだい。」

「了解。」

イーラとミランは目の前の家へと進んで行く。

試しに玄関をノックしてみるが、返事はない。

「ミラン？ 何やってるの？ そこはヒズミなのよ、あなた達以外に人はいないわ。」

「礼儀としてやっただけだよ！」

アヤにからかわれ、イラツときたミランは、それでも黙って、ドアノブに手をかける。

あいにく扉は空いていた。

キィイという音を立てて、扉は開いた。

「簡単二開いた。」

「ま、ヒズミの中だしな。」

「そういう自覚があるなら、少しは警戒してくださいよ。先輩。」

その場に現れたのは、先程図書館で会ったセオだった。

「セオじゃなか！？」

「居ちやいけません？ 私はイアン先輩の代わりに来たんですよ？」

あの体では、戦いはしばらく無理だろうとの結果を下した、医療班からの派遣だ。

彼女は二人の後輩であるため、先輩の代わりをするのは当然である

う。

「たっ頼もしいけどな……。」

「本当にそう思ってるんですか？」

どうやら男勝りなミランの上に行く存在であるらしいセオは、先陣を切って、家へと入って行く。

三人分の足音が響く。

入って左にリビングに続くであろう扉が、目の前には2階へ続く階段があり、三人はリビングへの扉を開け、セオを先頭として入って行く。

すると、シンプルな4人掛けのテーブルが目に入った。奥にはキッチンが、右側の空間にはソファアールがあり、テレビもあった。

セオとミランはハンドガンを持ち、警戒しながら慎重に進んで行く。その後をイーラは複雑な想いを抱きながら、ついていく。

なぜ、自分がこんな気持ちになるのか、わからないが……。

キッチンのすぐ横には、隣室へと続く扉があり、セオが慎重に開く。すると、室内はベッドルームになっていたが、これと言って異常は見当たらなかった。

「ここに一体何があるって言うんだ？」

「まだ2階がのこってます。慎重に行きましょう。」「イーラ、大丈夫か？」

「はい。」

そして一行は2階へ。

ギシギシと音を立てて軋む階段を上った先には、ふた部屋分の扉が向かって右側の扉には『child room』と書かれた扉があ

り、左側にも扉があった。

「どちらから行きます？」

「左だな。」

セオが扉を開く。

今度は物置のような部屋だった。又しても何も無い。

「残るは子供部屋……。」

ミランが先頭を切り、部屋の扉を開けた時だった。

『よく来たね……さあ、パーティーの始まりだよ。』

そこには、不適な笑みを浮かべた少女が立っていた……。

（続）

ちよつと休憩

「クローク」

No.0000 ちよつと休憩…

皆さんこんにちは。「クローク」を書かせて頂いています。繭墨あざかです。

今回は、「この物語を書くにあたって」「キャラクターのプロフイル」。など、作者の好き勝手な休憩コーナーです。

あつ！ちよつと待って！！ハイ、そうです。そこのあなた！

何？「クローク」じゃないなら読まない」？そう言わずに！！

休憩と称しておりますが、本編に関わる情報があります！！

何？「そんなもん、読んだことない」？

ご心配無用！

読んだ事のないかたにも、わかりやすく致したいと思っています。

では早速…

まずは、「クローク」を書こうと思った経緯について、お話ししたいとおもいます。

というか…実を言えば、ただいまテスト勉強中なんです。（10月9日現在）

いけませんね…（…）

本当に休憩なんですよ…勉強の休憩がてら携帯をポチポチ……

脱線しましたね。

さっさと話せ。って感じですよ。

話します。

私には、元々妄想癖がありまして…（気持ち悪いと自覚してます）主に、ファンタジーや、自分の望み、「こうなったらいいな」なんて事を妄想しておりました。

ところがある日。妄想だけでは留まらなくなり、自分の中でその妄想に『物語』が生まれました。

それが今回の「クローク」の始まりです。

最初は小さな物語りだったのですが、どんどん膨らんでいき、私の友人に、メールで送る所までにいたりしました。そして、帰って来た答えが、良いものでした。

通っている塾の出会いから友人となった方のお兄さんも、このサイトを利用していらっしゃる方です。彼は藍原 流星さんという方で、皆さんの中にも、ご存知の方が多いでしょう。（というか、これを見ている人が多くいるのか??）

その友人と、藍原流星さんとの出会いで、私はこのサイトを知り、今日まで至りました。本当にありがたいです。私の友人と藍原さん、ありがとうございます。

以上が、私が「クローク」を書こうとおもった、キッカケのようなものです。

次は、各キャラクターの設定をお届けします。

主人公『イーラ・アイリス』

彼女については、謎だらけですね。

その謎を、これから明かしていけたらいいな。なんておもっている、今日この頃…。

この物語りの舞台は2035年です。それを頭に入れて……。

『イーラ・アイリス』

性別：女 年齢：16

2000年4月7日生まれ

日系アメリカ人

「容姿」

身長：162cm 体重：46kg

髪：焦げ茶のツインテール

目：蒼色

「性格」

非常に大人しい性格。

感情を表に出すことは、あまりない。

しかし、その表情からは読み取れない大きなものを、彼女は抱えている。

疑問に思った事は、すぐに口に出す、知りたがりや。

「2010年」

彼女の運命を大きく変える出来事が。（まだ秘密です）

それによって、細胞の突然変異が発生し肉体が10代に保たれるという現象も同時発生。

しかし、翌2011年に行方不明。

「2035年」

ミラン達の任務により、イギリスで発見。ディーバ化が認められ、
『ディーバ研究所本部』に配属。

『ライ』式主：イーラ

性別：男 年齢：不明

???年?月?日生まれ

タイプ：炎

「容姿」(人間型)

身長：172cm 体重：52kg 髪：赤色でくせっ毛

目：オレンジ

「容姿」(式神)

体長：2m 体重：250kg

普段は小さな猫の容姿をしているが、自分の都合と、任務状況によつては、人間の少年に姿を変える事もある。コンバート時(式神本来の姿に、変身するって意味です。)には本来のライオンの姿になり、『炎ノ翼』で空を飛ぶ事もできる。

イーラの精神状態の劇的变化で、炎を纏った聖剣に姿を変える。

(今後、どんどん、技を増やしていきたいと思っている今日この頃
...))

「性格」

いつも明るく、茶目っ気たっぷりのやんちゃッ子。しかし、やるべきはやるしっかりした一面も。

パーフェクトな美貌を持つジェシカ(ミランの式神)に心惹かれて
いる。

『イアン』

性別：男 年齢：16

2019年9月23日生まれ

イギリス人

「容姿」

身長：170cm 体重：50kg

髪：浅黄緑 右側分け

目：緑

「性格」

いつも礼儀正しく、頭も良い。おまけに女性に優しい、英国紳士風。文句なしの性格だが、そんな完璧故に、ミランに少々ヤキモチを妬かれる部分も。口には出さないが、実はミランの事が好き!?

「2029年」

デীবアであった、イアン姉、リリアが戦死。

以後、リリアの式神であったウエンディを男子であるイアン（当時10歳）が受け継ぐという異例の事態が。

検査の結果、デীবアに成りうる細胞の突然変異が確認され、イアンのデীবア化が認められた。

姉の意思を継ぎ、2031年、12歳の時『デীবア研究所本部』に配属。

『ウエンディ』

式主：イアン

性別：女 年齢：不明

???年?月?日生まれ

タイプ：自然

「容姿」（人間型）

身長：161cm 体重：47kg 髪：白髪ショート

目：黄緑

いつもシンプルなデザインのワンピースを着ている。いわゆる『森ガール』のような装い。

「容姿」（式神）

身長：2.5m 体重：200kg

毛色：白

目：黄緑

額に角が生えた、ユニコーンのような姿をしている。その走りは軽やかで、風をも追い越す。『大地ノ恵』で、仲間の傷を癒す技を持ち、イアンの精神状態向上で、ツルの巻き付いた美しい弓へと姿を変える。

『風ノ刃』（ウィングカッター）で、敵を攻撃する。（これも技を増やしていきたい今日この頃…）

「性格」

とにかく元気っ子。よくライとつまらないことで喧嘩をするが、いつも勝利を収めている。

本部の長い廊下を歩くとき、ついつい鼻歌混じりにスキップをしてしまい、ライに笑われるのが、最近の悩み。

怒るとプーっとほっぺを膨らます。

『ミラン・カイツ』

性別：女 年齢：17歳

2018年8月11日生まれ

ドイツ人

「容姿」

身長：167cm 体重：50kg

髪：紫のポニテ こめかみ の部分の前髪が長い

目：紫

「性格」

他人の面倒見はいいが、口が悪く男性的な性格。しかし、アヤ博士にだけは頭が上がらない。そこそこ頭が良いが、その性格故に、認められない部分も。ミランといえど、一人の乙女。口には出さないが、心のどこかでイアンを気にしている。

「2018年」

有名な大企業の家に産まれる。当時はカイツ家の唯一の後継ぎとして、育てられ、令嬢として育つ。

「2023年」

しかし、高熱に侵され検査をしたところ、細胞異常が見つかる。両親は必死に治療を続けるも、効果は無く。

「2033年」

事実を知ったミランは、両親に反抗。ディーバになることを決意する。

「2034年」

『ディーバ研究所本部』へ配属。当時はまだ令嬢らしい振る舞いだつたが、ある任務がきっかけで性格が一変。（これもまだ秘密）
今に至る。

『ジェシカ』

式神：ミラン

性別：女 年齢：不明

???年?月?日生まれ

タイプ：氷結

「容姿」（人間型）

身長：165cm 体重：42kg

髪：薄い水色ストレート目：青

超ースタイルがいい。

魅惑の8等身

「容姿」（式神）

体長：3m 体重：450kg

毛色：蒼

額に角（あれ？どつかにも

居たな…？）

氷結のフェニックス。

その瞳は美しく、射止めた相手は逃がさない。

鳥なので勿論空は飛べる。翼を広げると5mぐらいになる。『零度

ノ風』は、翼を大きく羽ばたかせ、冷気の爆風を巻き起こす。『氷河天災』では巻き起こした風で雲をつくり氷針を降らせる。背中に乗ることが出来る、定員は4人。ミランの精神状態向上で美しいラインの鎌へと姿を変える。

「性格」

少々高飛車な、お嬢様キャラ。本人いわく、カイツ家の影響らしい。チャームポイントは紐状のカチューシャ。ジェシカはピンクが好きなので自分の容姿にコンプレックスを抱いている。

しかし、女性ならば誰もが手に入れたくなるような、魅惑のスタイルの持ち主。（作者は描けません！が8等身の美少女だと想像してください。）

『アヤ博士』

性別：女 年齢：??歳

???年?月?日生まれ

「容姿」

身長：169cm 体重：53kg

髪：焦げ茶のボサボサ

目：蒼色

いつも薄汚れた白衣を着ている。白衣の中には、深緑のTシャツにジーンズ。

「性格」

頭はいいのに、とにかくだらしない。博士の癖に、研究のサボり魔。隙さえあれば欠伸をしている。そろそろ結婚に焦っている。最近の口癖は「お腹減った…」。

しかし、真面目な時は、とことん真面目。

「?????」

アヤの経歴については、ほとんどが不明。

他の人物の情報は、ある程度データに記載されているのにも関わら

ず、アヤの経歴だけがわからないため、不信感を抱くものも。

（あゝ…テスト、オワタ　ただいまです）

ここまで、読んで下さった方、本当にありがとうございます。そして、作者の我が儘にも。

今回は以上です。

他メンバーについてはまた次の機会に。

上の人達については、皆様の頭のなかで、勝手にイメージし、そして、勝手に落書きしていどに、暇な時にでも、描いてやって下さい。今回は、本当にありがとうございます。

今後とも本編と共に「繭墨 あざか」をよろしくお願いします。

ではまたどこかで

繭墨　あざか

戦闘開始

「クローク」

No.004

戦闘開始

今、3人の目の前に立っているのは、確かに少女だ。ぶかぶかの白い服に紺色のミニスカート。そして黒ボーダーのニーソ。しかし、ただの少女ではなかった。

「遅い遅いディーバ達は、何をしに来たのかな？」

「てめえ！ やっぱリアルか！！」

「今更々？？気づくのも遅いんだね！」

アンリアルの少女が口角を吊り上げてニマニマとした笑みを浮かべた瞬間、辺りの景色が変わった。

「なっ！ なんだ！？」

辺り一面白黒に包まれた世界。

イーラがDIVE後に見た、あの景色と同じだった。

「ヒヒっ！」

少女が不適な笑みを浮かべる。途端セオがいち早く動いた。

「清らかなる水流の流れよ、大地に恵を・・・オーシャンマーメイドー！」

セオの足元から美しい鱗を纏った人魚が現れた。体長は1.7mほ

どだろう。

魚のヒレのような耳を持ち、空間を流れるように泳いでいる。

「サラ！」

サラと呼ばれた人魚は祈りを捧げるかのように腕組み、少女の足元から水流を出現させた。

少女が水に飲み込まれる。

「ヒヒっ！」

しかし、以前少女は不適な笑みを浮かべている。すると、両腕を左右に広げ、水流を弾いた。

「くっ！！」

「こんなじゃ、このアンナ様は殺せないよ？ さあ！ 次は誰かな！」

「私だ！！」

アンナと名乗った少女がミランを挑発する。

「天空の使者よ！ 今、天災を！ ブルーバード！」

ミランの胸元が蒼く燃え上がり、氷結の炎に包まれたフェニックスが現れた。ジェシカだ。

「『零度ノ風』！！」

ジェシカは大きく翼を羽ばたかせ、絶対零度の嵐を生んだ。氷結の炎が、アンナに襲い掛かる。

しかし、黒い力によって弾かれた。

「弾かれた!?!」

「こんなんで、攻撃出来ると思っただけ?」

再び、ニマッと口角を吊り上げる。

途端3人の足元が揺らいだ。

自らの『影』がうごめいている。

「なっなんだ?」

「ボクのシャドー! 見せてアゲル!!」

3人が闇に包まれる。

体のまわりを影が暴れた。

「くっ!」

「キャッ!」

「うっ!」

必死に目を閉じ、3人はもがいていた。

その頃、本部では『ヒズミ』の正確な出現場所と時間を特定している真つ最中だった。

「早く解析を急いで!」

「はい!!」

「アヤ博士、なぜそんなに?」

「ミラン達との通信が12分前から途絶えたままよ。もう『ヒズミ』に入った可能性があるわ。」

すると一人のオペレーターが声をあげた。

「博士！」

「何！？」

「正確な出現場所と時間が、特定出来ました！」

「出して！」

オペレーターがキーを打つ。大型モニターに、写し出されたのは。

『PLACE：JAPAN』

『TIME：2005・04・07』

「この日は！？」

アヤには見覚えがあった。

そしてアヤが驚きに翻弄されている頃、ミラン一行は、夢の中にいた。

「ここは・・・どこだ？」

暗闇の中、ミランは一人。

「ここは？・・・先輩？」

暗闇の中、セオは一人。

二人はさ迷っていた。

どこからか、楽しげな歌声が聞こえてくる。

「ここは??」

『ハッピーバースデートユーユー　ハッピーバースデートユーユー』

「誕生日??」

イーラの目の前に、光が差し込んだ。
何やら、もやもやと映像が飛び込んで来た。

『誕生日おめでとう。』

『おめでとう。』

『わーい！　ありがとう！』

そこには、とても平和そうな、家族の姿が写し出された。どうやら女の子の誕生日を、家族皆で祝っているらしい。
両親と兄に囲まれ、女の子は微笑んでいる。
その光景をみたとき、イーラは妙に懐かしさを覚えた。

しかし、油断はしてられない。今は戦闘中なのだ。

イーラは、はつとしてライを呼び出した。

「ライ……。」

イーラの胸元が赤く燃え上がり、やがて炎は一頭のライオンへと姿を変えた。
辺りに意識を集中させる。

今この空間にいるのは自分だけだ。
自分の力で、何とかしなくては。
すると今まで見ていたあの光景が、掻き消され、目の前に『影』が
現れた。

「ちえゝ。堕ちなかつたかゝ。あんた、ディーバの分際で、精神しんしんは
強いんだあゝ。」

「あなタは！？」

「面白そゝ！ボクと遊んでよ！」

そういったやいなや、アンナは、脅威のスピードで、イーラに襲い
掛かる。

「速イ！！」

驚愕の声をあげたイーラに、『影』が迫り来る。
その時だった。

右方向から氷の刃が飛んできたのは。

「なんだ？」

アンナは困惑しながら右方向を見る。

そこには美しい青い翼を持ったフェニックスと、それを操る者が。
ミランだ。

「イーラ！ 大丈夫か！？」 「いいとこだったのに！ 邪魔するな
！！」

すかさずアンナは目標をミランへと変え、猛攻撃を仕掛けた。
今までの『影』とは違うなにかが、ミランに襲い掛かる。

その『影』には、顔のようなものが現れ、腕も現れた。

「ジェシカ！『アイスウォール』！」

ミランの声と共に、ジェシカは地面に向かって氷結の炎を吐く。すると、そこから文字通り氷の壁が現れた。

『影』がアイスウォールに突っ込んでくる。

「シャーーーーー！！！」

「くっ。」

さすがミランだ。壁は破壊されることなく、ミランを守り続けている。

「そう。これじゃあ駄目なんだね？これじゃあー！」

アンナが声を上げる。

すると『影』はさらにその大きさを増した。

「遊びは終わり。ボクもうそろそろ本気だよー！」

煙りのようだった『影』は実態を持ち、アイスウォールを貫き、ミランに直撃した。

爆風と共に激しく黒煙が舞う。

勢いで、ミランは後ろへ吹っ飛ばされた。

「ミランっ！！！」

「キャハハハハハハハ！！！！ 快っっ感！！！」

普段は大人しいイーラム、この時は黙っていられなかった。そして、自分の中に『感情』が産まれるのを感じた。

この熱い気持ちはなに??

胸の中を、この気持ちが支配するみたいなの……。

アンナを……。アンリアルを倒したい!!

ミランを傷つけたやつを!

「……さない……。」

「何? もっと大きな声で言ってくれないとわかんないよ??」

アンナがイーラを挑発した。その時だった。ライに異変が生じた。

「グウガアアアアー!!」

大きく吠えて激しい炎に包まれる。そして現れたのは……。

「許さナイ……。許さナイ……。」

『それ』をイーラが握りしめる。

『それ』は一振りの剣だった。

炎を纏い、長さは140cm程だ。

持ち手の上の部分には装飾が施されており、蝶のような形をしている。中心部分には、真つ赤な宝玉が埋め込まれていた。

その剣を握り、イーラは

アンナへと攻撃を仕掛ける。

「へえ〜。度胸あるね〜。」

そんなアンナの挑発は、イーラの耳には届いていなかった。

まるで、操られた人形のように、イーラはライを振るう。
真上から、ライを振り落とした。

「シャドー！」

しかし、横合いからアンナの式神がとびたし、イーラの攻撃を受け止めてしまった。

ギンっという音と共に、ライとシャドーの爪が擦れあう。

「ボクを殺そうとしたって無駄だよ！」

勝ち誇ったように、アンナが叫ぶ。

「……………」

依然として、イーラは反応しない。

目標はアンナだけだと言っているかのように、シャドーには目も暮れず、一直線にアンナへと向かう。

そしてアンナの目の前で、ライを振るった。

「おっと、危ない。」

振るったライの風で、アンナの前髪が揺らいだ。

アンナの額に、黒い宝玉が埋め込まれていたのがちらりと見えた。

イーラはその宝玉へと目標を変え、アンナへと迫る。

だが、やはりシャドーが横合いから邪魔を入れた。

ちょうどタイミングのいい瞬間にライを振るっていたので、見事にシャドーを真っ二つにすることに成功した。

「ちっ……斬られちゃったか……。」

くやしがるアンナをよそに、何事もなかったかのように、再びアンナへと迫る。

何度かアンナを斬り付けようとするが、バックステップで、避けられてしまう。

「遅い遅い!!」

「……。」

アンナの言葉は、イーラには届いていない。もはやイーラは怒りに心を操られ、暴走してしまっていた。

そんなイーラに気が付いたライが、すぐさまイーラに声をかける。

『おい！ イーラ！ 正気に戻れ！ イーラ!』

ライの言葉もイーラには届かなかった。

「あんだそんなんじゃないつか式神に捨てられちゃうよ??」

そう言ったアンナは、跳躍し、イーラから距離をとった。

「さ迷いし幾多の魂よ、今ボクに集え!!」

腕を左右に広げ、アンナは再び式神をコンバートした。

なんとそれは、先程イーラが斬ったはずのシャドーだった。

「ボクを倒さない限り、シャドーを消すのは無理だよ!!」

アンナが叫ぶと、シャドーが巨大化し、イーラへと襲い掛かる。不意打ちだった。

イーラはライを構える時間がなく、その場に伏せることしか出来なかった。

「消えちゃえ！　ディーバ！」

シャドーの鋭利な爪が、イーラを斬り付けようとしたその時だった。ギンっという音がイーラの頭上でした。

「何っ！？」

「けっ・・・ディーバを甘く見てもらっちゃ困るな！」
「お前は！！！」

ミランだった。

あの後、体制を立て直したのだ。しかし、その身に受けた傷は、浅いものではなかった。立っているのがやっではないだろうか。その左手には、蒼い炎を纏った鎌が握られていた。ジェシカだ。長さはこちらも140cm程。刃の部分には、丸みを帯びた美しい模様が描かれている。

一方、右腕はぶらんとしたまま動かない。爆風を受けた衝撃で地面に落ちたとき、受け身の体制が失敗し、手首を折ってしまったのだ。頭も強く打っており、目が霞んだ。何度も瞬きをし、アンナを見据える。

「生きてたんだあ。」

「ハア・・・わ・・・悪いかっ！　ハア……。」

「ヒヒっ！　その体でボクと戦えるの？」

「私一人じゃ・・・無理かもな。だが一人じゃないんでね。」

突然のミランの登場に、我にかえったイーラは立ち上がり、ミランの左に並ぶ。

「ごめんナさい…。」

「なんで謝る？ イーラのおかげで、少しは体制を立て直す時間できた。」「大丈夫？」

「へっ！　こんなん、かすっただけだよ。」

そう言っでミランは笑ってみせた。

そしてイーラの耳元で、こんなことを囁いた。

「イーラ。いいかよく聞け。話してなかったが、式神同士では、連携技が使える組み合わせがあるんだ。」

「連携？」

「ああ。私らはラッキーだったな。」

「どういウ意味？」

「イーラは灼熱の炎。私は氷結の炎。一見正反対に思えるが、私らの組み合わせは相性が良いんだ。」

『灼熱の炎』『氷結の炎』

この二つの炎が、大きな力を生む。他にも、

『清流の水』『大地の自然』この二つも相性が良い。

しかし、相性のあうパターンがない『鉄槌の雷』は、連携技が使えないため、とても扱いが難しく不利なタイプと言われており、デイベの中でも選ばれた者だけが、手に入れることの出来る式神だ。

「私が、合図をだしたら、イーラはライの遠距離技を頼む。」

「わかッタ。」

今まで二人の会話を、見ていたアンナが待ちきれなくなったのか、口を開いた。

「そろそろ遊びは終わりだよ？　どんなに話しあったって、あんた

達がボクに勝つ事は無いんだからさー！」

「ハっ！ それはどうか？」

そしてミランは左手でジェシカを握り直し、アンナへと迫る。
立て続けに、攻撃を繰り返した。

「『氷河天災』！！」

鎌が蒼い炎に激しくつつまれ、氷結の刃が飛び出す。それをシャド
ーが横合いから散らしていく。

「やっぱり駄目か…。」

「言っただしょう？ ボクは殺せない。って！」

アンナが叫び、前髪が再び揺らぐ。そしてミランは、アンナの額に
黒い宝玉があることに気が付いた。

「なるほど。そういう事か！」

バックステップでイーラの元へと戻り、再び耳打ちする。

「今の、見えたか？」

「うん。額二黒い宝玉が。」

「そうだ。私が思うに、きっとあれがシャドーの本体だ。あれを狙
え。」

「やってミル。」

イーラは全神経をライ、いや『ファイアドラゴン』に集中させる。

「さあ。行くよ！ ボクのシャドー！！」

アンナのシャドーがイーラム掛けて突進してくる。その時だ。

「イーラ！！今だ！」

ミランの合図を受け、イーラは目を開ける。そして、一直線にアンナの額へと『灼熱ノ吐息』を放つ。

「行っけエエエ!!!」

聖劍から灼熱の炎が放たれる。それはシャドーを直撃し、勢力を保ち一直線にアンナへと向かった。そしてイーラの放った『灼熱ノ吐息』に軌道を合わせ、続けてミランが放つ。

「行けよ！ 氷河天災！」

鎌から蒼い炎が竜巻のように放たれる。氷柱の刃が入り交じったその炎は、イーラの炎と一体化し、紅と蒼で莫大な力を生み出し、ア
ンナへと一直線だ。

「行け工工工工工！！」

「行けえええええ！！」

二人の聲が重なった。

「なっ！！　ボクのシャドーがつ！！」

そして二つの炎はアンナを貫き、黒き宝玉を破壊した。

「キヤあアあ あああ——！！！！！！」

アンナは悲鳴をあげ、『ヒズミ』の歪みへと消えていった…。

「ハアハア……。」

「終わった……。」

イーラの握っていた剣は炎へと姿を変え、イーラの中に帰った。
そしてジェシカも。

その瞬間、目の前が霞み、そのままイーラは倒れてしまった。

「イーラ！ 大丈夫か！？」

イーラを支えながらミランが問う。しかし、疲れきったイーラが返事をする事はなかった。

そしてミランも。

「あれ……？ なんか目が……久々に力使い過ぎ……たかな……。」

その場に倒れてしまった。

そして二人が倒れてしまったあと、『ヒズミ』は消え、もとの廃屋へと変わった。暗闇の中で困惑していたセオも解放され、気が付いた時には、二人が目の前に倒れており、『ヒズミ』の消滅と二人の無事を本部に連絡。

これにて、イーラの初任務は、閉幕を迎えた。

3人は『ヒズミ』が消滅した事で、現時空間へと戻され、本部に帰還。ミランとイーラは医療班に治療を受け、セオはアヤへの事後報告にあたった。

「お疲れ様。大変だったわね。」

「いえ。私なんか何も出来ませんでしたし、敵の罠にはまって戦いに参加することも出来ませんでしたから…。」

「それでも、二人を無事に本部に帰してくれたでしょう?」

「でも……。」

アヤの研究室でセオとアヤが話している頃、医療室では、イーラが目覚めました。

(ここは・・・?ワタシ帰って来たノ……?)

そして、少女は知らない。

もう一人の少女が、夢から覚めたのを……。

全ての始まりは、これからだということを……。

t o b e C o n t e n e w . . .

花（前書き）

みなさん、明けましておめでと〜ございます。

繭墨あざかです。

年が明けましたね〜

私は今年受験です…（Ｔ・Ｔ）そのため、執筆が遅れる事がありますが、ご了承ください。

では皆さん、第五話目。

今年もクロークを読んでやって下さい…。

よろしく願います…！！

花

「クローク」

No.005

花

イーラの初任務から1日がたった。

イアンは劇的な回復を見せ、今では遅れを取り戻そうと、修練場で修練を重ねている。

ミランはしばらく、医療班のお世話になりそうだ。当の本人はそれを嫌っているが……。

「まったく、婦長の奴！ 余計なお世話だつてんだ！」
との事らしい。

イーラは、特に外傷はなく、精神的な疲労によるものだったので、すぐに回復をみせた。

「イーラさん大丈夫？」

「はい。」

「それならよかったわ。」

ミランが言っていたより、婦長さんは優しくかった。

「あつそうそう。さっきアヤ博士が呼んでたわよ？」

「あやはかせが？」

「ええ、大広間に来るようになって。勿論、体の具合がよければの話だけど。」

アヤ博士直々の呼び出しという事は、『仕事』関係の話だろう。イーラはそう考えを巡らせた。

「大広間への行き方はわかる？」
「はい。」

以前、イーラがミランに連れられて、図書室へ行ったときに通った場所だ。あの時も、ここ医療班から図書室へ向かった。おそらく、道筋は同じだろう。

この広い本部の中では、『道のり』と言った方が正しいだろうか？ そんなことを思いながら、イーラは医療班を後にする。

「お世話になりました。」
「お大事にね。」

医療班を出たイーラは、図書室へと向かった時のことを思い出す。確か階段を下りたような…。

ここは本部の12階。図書室は7階だった筈だ。ということは、大広間は8階だったのだろうか。

まあ、とにかく探検がてら、大広間へ向かい本部の創りを把握していくのも悪くない。早く自分も覚えなければ。

そして何段もの階段を下り、イーラは大広間の入口へとたどり着いた。相変わらず入り口には大きな扉が立ち塞がっている。たしか扉を開けるには……。

（「ここに、紋様が書かれてるだろ？　ここに、式神のエネルギーを込めるんだ。」）

と、ミランは言っていた。

大広間の扉には、龍の紋様が描かれている。イーラはそこに手をあて、エネルギーを込めた。

龍の紋様の輪郭が赤く小さい炎をあげた。

すると、扉はギィという音を立て、ずっしりと開いた。

大広間は非常に広く、『ディーバ研究所支部』の支部長達が集まり会議が行われることもある場所だ。しかし、流石の大広間でも『DIVE室』には及ばないが。

そんな大広間の中へイーラは入って行くが、全ての照明が落とされ、大広間内は暗闇に包まれていた。来るのが早かったのだろうか？そうイーラが思った瞬間だった。突如照明が点き、大勢の人々が笑顔でイーラを出迎えた。

『ようこそ！本部へ！』

クラッカーを持つ者、拍手をする者、と様々ではあったが、どうやら自分を迎えてくれているということは、分かった。

高い天井には様々な装飾が施されており、広い大広間内は今やパーティー会場のようになっている。数々のテーブルの上には、いい香りを漂わせる豪華な料理が並んでいた。イタリアンに中華、和食やインド料理など様々だ。

迎えてくれた人々はその大半が白衣を着ている。アヤの部下である人達だろう。その中に、イーラがよく知る顔ぶれがあった。

「これは・・・？」

「ようこそ、我がディーバ研究所本部へ。」

「イーラさんのために、Welcome partyを開いたんですよ！」

どうやらこれは、イーラのWelcome party。

アヤが大広間に来るようにと言ったのは、このことだったのか、と今になって気づく。

「わたしのために？」

「そうよ、イーラさんのために、皆さんを集めて一夜限りのpar

tyです！」

「今夜だけは楽しみな！ お嬢さん。」

アヤ博士にイアン、セオにカイルという顔ぶれだった。

「今日から貴女は、私達の仲間よ。」

「よろしくね！」

「よろしくな、お嬢さん！」

「イーラさん、改めまして、よろしくお願いします！」

「よ……よろしくおねがいします。」

普段はあまり感情を表に出すことのないイーラであったが、この時だけは思わず笑みがこぼれた。

「あつ！ イーラさんが笑った！」

「本当！」

皆に囲まれ、イーラは幸せだった。

「さあ、好きなものを食べてちょうだい！」

好きなもの……。

イーラは自分が何が好きなのか、実のところよくわからない。

しかし、真っ先に目に着いた食べ物は大きな鍋一杯に作られた、コーンスープだった。

思わずそれに手が伸びる。

「……おいしい。」

イーラは妙な懐かしさを覚え、不思議な感覚だった。

「よかったわ、それ私が作ったのよ。」

「えっ！ 博士がつ！？」

「なに？ 私が料理出来ない女だと思ってたの？」

アヤの意外な言葉に、イアンは思わず驚きの言葉を口にしてしまった。

「あ、いえ・・・すみません・・・」

「いいのよ、そんなのはもう慣れっこだから。」

アヤ達の周りに集まっていた人達の笑いが辺りを包んだ。
イーラもそれにつられて笑みを見せる。

「あつまたイーラさんが笑った。」

「そうして笑っている方が、ずっと可愛いわ。」

再び笑いに包まれる。そんな幸せがイーラを包みながら、パーティーは華やかに幕を閉じていった。

一方、華やかなパーティーをよそに、不満を現わにしている者が約一名……。ベッドの上で、愚痴をこぼしていた。

「けっ！ いいよなあいつらは！ パーティーに参加出来てよ！」

「ミラン、そんなにスネないの。」

「拗ねてねえよ!!」

ミランはなかなか開かれないパーティーに参加することが出来ず、一人毒づいていた。

そんなミランの元に来客が訪れた。ノックの音が響く。

「しつれいします…。」
「どうぞ。」

片手に小さなバスケットを持ったイーラだ。そして後にはイアンが続く。

「みらんだいじょうぶ？」

「イーラじゃなか！」

「なんだ、その調子じゃ元気そうだね。」

「イアンこそ！ 治るの早過ぎだろ！？」

「僕は、『大地ノ恵』を使えば早く治るからね。ミランにも後で治療してあげるよ。」

イアンの式神、ウエンディは自然タイプで『大地ノ恵』という技を有している。そのため怪我の治りが早いのだ。

「これたべてはやくげんきになつてね。」

「ああ、ありがとなイーラ。それに…。」

「分かつてるよ。全くミランは照れ屋なんだから。」「てっ照れてねえよ！」

たちまち医療班は笑いで包まれた。ミランが参加することは出来なかったが今や小さなパーティー会場のよう。

イーラが差し出した料理を食べながら、小さなパーティーも終わりを告げた。

「じゃあわたしはこれで、みらんおだいじに。」

「おう！」

「私もそろそろ、研究室に戻るわ。」

「ああ。今日はありがとな。」

「僕はミランの治療のために残ります。」

「ああ。よろしく頼む。」

皆が部屋を出ていく。イーラの歓迎パーティーのつもりが、まるでミランのお見舞いのようになってしまった。

「さてと、じゃあ横になって。」

「ああ。」

今まで座っていたミランはベッドに横になる。

「痛いところない？」

「やっぱ右腕だな・・・。」

「見事な折れ具合だつて婦長さんもいつてたしね。見せてみて。」

ミランの右手首には包帯が巻かれていた。

前回の戦いの時の怪我である。

受け身をとったが失敗し、綺麗にポツキリいつてしまった。

「あんまり触るなよ、痛いんだから……。」

「うん。」

イアンはミランの右手に手の平を置き、目を閉じてエネルギーを集中させる。途端、エメラルドグリーンの光がミランの右手を包んだ。蔓つるのような物が、ミランの右手を優しく包みこんだ。

やがて、それには葉が生え、蕾ができ赤い花が開いた。

これがイアンの『大地ノ恵』だ。自然の力で、傷を癒す。花がミランの傷を吸い取るのだ。

「この花が枯れるまで、右手は安静にね。」
「ああ……。」

ミランは静かに目を閉じながら、微妙に返事をした。
この技の厄介なところはこれだった。傷を癒す対象者の眠りを誘ってしまふ事だ。そのため、戦闘中に使う事が出来ないことだった。
やがてミランは深い眠りの底へと落ちていく。

「じゃあね、ミラン。」

イアンは眠っているミランにそつと話かけながら、布団をかけ、医療班を後にした。

一方、イアンよりも先に退室していたイーラは再びアヤに呼び出され、今はアヤの研究室にいる。

アヤの研究室は個室になっていて、広さは8畳ぐらいだ。この部屋の雄一の家具である長テーブルには研究資料が山のように置かれているが、綺麗にまとめられていた。

フラスコやビーカーなども水洗いされ、干されている。そして最新のノートパソコンも置かれており、画面には様々な計算式が映されていた。イーラ一瞬その画面を見たが、アヤによって閉じられてしまった。

「あの、はなしってなんですか？」

「急で申し訳無いんだけど、あなたには私の研究を手伝って欲しくて。」

「わたしに？」

「ええ、やってくれるかしら？」

イーラはしばらく考えた後、アヤの研究を手伝うことにした。

「わたしにできることなら。」

「よかったわ。」

そうって、アヤは何やら本棚の本を一冊取り上げた。すると、本棚が重い音をたてて左右に別れた。

「よくあるカラクリよ。ついて来てちょうだい。」

「はっはい！」

イーラは驚きつつもアヤの後ろについてゆく。

中は下へと続く螺旋状の階段になっていた。薄暗く、まだまだ暑さが残る初秋にも関わらず、肌寒かった。

「この道は誰にも教えてないのよ。」

「なぜわたしを？」

「私があなたを気に入ったから。」

「え？」

「面白い子だとおもって……だから、この事は内密にね。」

「はい。」

アヤの研究室があるのは本部の5階のため、幾段もの階段を下りなければならなかった。

この階段は地下へと繋がっているのだ。

なぜこんなところにこんな隠し階段を造ったのか、イーラは非常に疑問だった。

「着いたわ。」

そう言ったアヤの目の前には、大きな鉄壁のような扉があった。脇

には、小さなモニターがあり、0～9までの数字が映し出されていた。

アヤはそのモニターに触れ、数字を入力している。

「0407。これが暗証番号よ。」

「おしえていただいていいんですか？」

「あなたにはそのうち自由に使って貰う部屋になるからね。」

鉄壁の扉がガシャッと音をたてて開く。

部屋の中は広い空間になっていた。四方を囲む壁は全て無機質なコンクリートに囲まれていた。

やはりこの部屋にもパソコンが備え付けられている。しかし変わった物もあった。

部屋の奥には浴槽のような物がいくつか並べられていて蓋が固く閉じられている。そのため中身を確認することはできない。

よく見ると、浴槽の周りが濡れている。

「これは？」

「じきに分かるわ。」

不思議に思ったイーラだが、細かいところは聞かない事にした。

イーラは浴槽にそつと近づき、触れてみる。浴槽本体も濡れていた。さらさらとした水というよりは、ねっとりとした感覚だ。母胎の羊水を思わせる液体だった。

「あなたに手伝ってもらう研究はズバリこれよ。」

「これ……。」

「私はこの中身にある者について研究を進めてきたわ。それはまさに、私達の戦いの原因を無にできる存在。この研究が成功すれば『ヒズミ』の出現率も格段に減るはずよ。」「すごいけんきゅうです

ね。」

「そうかもしれないわ。やはりあなたには詳しい話をしておくべきね。」

アヤは話しながらイーラの背後にまわる。

「現在、私たちディーバの数は全人数で約23人しか確認されていないの。にも関わらず敵の戦力も未知数・・・だから私はこう考えた。」

「なんですか？」

イーラが浴槽を見つめながら問う。

「人工的にディーバを造ることは出来ないのか・・・。」
「ではこれは・・・。」

「そうね。もう予想がついてるかも知れないわ。イーラ。だからあなたには・・・。」

アヤが話しかけた時、イーラの身体に電流が走った。ショックでその場に倒れ込む。

「っ！！！！？」

イーラは驚愕に支配され、そして薄れゆく意識の中で見た。

「あなたには・・・手伝って貰うわ・・・。」

眼鏡の奥に光るアヤの瞳と、不敵に微笑むアヤの笑みを。

t O b e c o n t e n e w . . .

二人目の玩具

6 「クローク」

No. 006 二人目の玩具

ココハドコ？

少女は問いました。

でも答えは返ってきません。

暗闇の中、少女は問います。

ココハドコ？

変わり始めた世界の中で、少女は問います。

ここはどこ？

たった一人で少女は問います。

深い森に迷い込んでしまった、お伽話の二人のように。

此処は何処？

わずかな月の光では、ここがどこだかわかりません。
しかし少女は一つの『可能性』を見つけました。

イキラレル？

『可能性』は歪み、『ヒズミ』となってしまうても、少女は『可能

性』を探します。」

光の向こうに闇があっても、少女は。

『No.002』は、目覚める事を許されました。

オハヨウ

おはよう

「おはよう。イーラ。」

薄暗いイーラの個室に、眩しい朝の光が差し込んだ。
シャーっというカーテンの音に目を覚ます。

そこには、朝日に照らされたアヤの姿があった。

「お・・・おはようございます。」

「よく眠れた？」

「はい。」

本部に来て日にちも経ち、イーラにも個室が与えられた。
今までは、まるで物置部屋のような場所で生活していた。
そこは地下で、今のように眩しい太陽の光も届かなければ、鳥たち
の囀りさえ聞こえない場所だったのだ。

6畳ほどの小さな部屋にはベッドが置かれ、小さなテーブルも置かれて
いる。とても殺風景な部屋だ。

しかし、この部屋の良いところは窓が大きいことだ。イーラの部屋

は南側で、北側のミランの部屋に比べれば、良いものだった。この部屋雄一の良点だ。

「気分は？」

「だいじょうぶです。」

「ならよかったわ。昨日、私の研究室で急に倒れたから驚いたわ。」

アヤはわざとらしい笑みをイーラに向けているが、本人は気付いていないようだ。

それもそのはず、イーラは。

「あの、なにがあったんですか？」

「覚えてないの？」

「はい。」

昨日のあの出来事を全く覚えていない。

『何者』かの策略によって。

「昨日私の研究室に来たとき、いきなり倒れたのよ？まだ気分でも悪いんじゃないかと思ったけど。」「だいじょうぶです。」

「そう。」

場に沈黙が訪れた。

しばらくして、アヤが口を開く。

「次の任務に行ってもらいたいんだけど、大丈夫かしら？」

「はい。なんですか？」

「今回は、DIVEではなくて、調査に行ってもらいたいの。」

「ちようさ？」

ディーバの任務は様々だが、その中でも最もハードだとされるのが、DIVEを駆使した任務だ。そして一番楽だとされているのが、今回の任務、調査だ。

「本当はミランに任せようと思っていただけ、彼女、調査は嫌いでやってくれないのよ。ま、しょうがないんだけど。」

アヤの顔が一瞬曇った気がしたが、気のせいだったかのように、すぐに元の表情に戻った。

「みらんはもうだいじょうぶなんですか？」

「回復はしたけど……。イアンとセオと行ってもらうわ。」

「わかりました。」

「じゃあ、門の前で待ってるわ。準備が出来次第、来てちょうだい。」

「

アヤが部屋をでていき。イーラは一人、任務の準備を始めた。

私服を着ていたため、制服に着替える。相変わらずサイズはぴったしで、先日の任務のときに汚れてしまったのも忘れたかのように、綺麗に洗われていた。

制服に袖を通す。

「ん？」

その時イーラはある異変に気が付いた。

それは自分の右手にある『痣』の形だった。

痣、というよりもそれは、数字のように感じていたのだが、それが変化していたのだ。

「002……?」

以前までは『001』と見えた痣だったのだが、『002』と見える。

しかし、イーラは気にする事を止めた。

それは、イーラの気が付いた時からあり、たいして気にしていなかったからだ。

「らい…。」

イーラがそう呟くと、胸元が赤い光を放つ。そして少年が現れた。

「呼んだか?」

「にんむ…。」

「リョーカイ。」

イーラはライを連れて部屋を出た。

相変わらずの階段の多さにはもう慣れたが、それでもエレベーターぐらい造つても良いんじゃないかと、ライは思った。

幾段もの階段を下り、やがてイーラは門に到着した。この場所に来るのは初めてだったが来るのに苦労はしなかった。アヤからもらった本部の見取り図を手に来たからだ。

ミランが言っていたように、本部の創りを丸暗記させられなくて幸運だったと思う。

門は本部の1階に存在し、文字どおり本部の敷地内と外の世界を隔てる『門』だ。高さは5、6メートル程だろう。しかし、その大きな割には軽い素材で出来ているため、少女の力でも簡単に開門することができる。

そして、門の前には二人の後ろ姿があった。イーラに気づいたイア

ンがこちらを振り向き手を振った。

「イーラさん。」

「ごめんなさい。まちましたか？」

「いえ。大丈夫ですよ。」

相変わらずの優しい笑みをイアンは浮かべる。

「さて、行きましょう。」

続いてセオがイーラに笑顔を向ける。

「はい。」

「おう。」

一行は両脇を茂みが覆う道を歩きだした。

まだまだ暑さの厳しい日が射す中、4人は影をのばす。

その4人を見ている者がいた。

「主任。次はどのような。」

ひざまづき、仮面を付けた怪しい女の声が響いた。主任と呼ばれた者が振り返る。

「今後はおまえ達に任せる。」

「はっ！」

「ただし……。あの娘だけは殺すな。なんとしても、任務を成功させる。」

「仰せのままに……。」

女が恭しく頭を下げる。

仮面のしたに、怪しげな笑みを浮かべて……。

- - - - -

「そういえば、あやさんは？」

アヤがイーラの部屋を出ていくとき確かに、門の前で待ってるわ。と言っていた。しかし、自室を出た後、イーラは一度もアヤを見ていない。

「ああ。アヤ博士なら、仕事があるから、後はよろしくって言うてたわ。」

もうそろそろ駅が見えて来た頃だったか、セオが思い出したようにそう言った。

「いそがしいのかな？」

「アヤ博士はいろいろな研究をしていますからね。僕達にばかり構ってはもらえませんよ。」

イアンが微笑みながら言った。

少し遠くで、列車の汽笛が鳴り響いた。

「早くしねえと気ちまうぜ？」

ライが気づいた様に言う。

そして一行は慌てて列車へと、足を急がせた。

- - - - -

イアン一行が足を急がせる頃、本部では。

「ちっ！まだ外に出られねえのかよ！！」

「まあ、落ち着いてミラン。調査を拒否してるのはあなたの方なのよ？」

ミランの自室に訪れたアヤが呆れた笑みを浮かべる。

「った、確かにそうだけどよ……。」

痛い所を突かれたようにミランが口ごもる。

そしてアヤの顔つきが変わった。と、同時に場の空気も変わる。

両親が子に深刻な話をする前のような、あの空気だ。

「あれから、3年ぐらい経つのね。」

ミランは俯いたままにも言わない。

その瞳は空間を捕らえている。

「もう、忘れたかと思っただけ……。」

「へっ。忘れる方がどうかしてるだろ。」

「そうね。」

アヤが懐かしげに言ったが、ミランは不快に思っているらしい。

しかし、一瞬ミランの顔つきが少女の物へと変わった。

そして、普段のミランには有り得ない言葉を口にした。

「あの時の事は、忘れはしないわ。そう、忘れはしない……。」

「変わってしまったわね。あなたも。」

ミランにしては、随分と女らしい、淋しげな口調だった。

「私だけじゃないはずよ。あの日から、みんな変わってしまったんじゃない？」

「それもそうね。」

ミランに続き、アヤも悲しげな笑みを浮かべた。

- - - - -

「ふう……。」

イアンが列車中で安堵のため息をついた。

「なんとか……間に……合ったわね。」

息を切らしたセオが言う。

今一行は目的の列車中にいる。

通常は一般車両だが、ディーバの特権を使い、2等車両にいる。

彼等の着ている制服の、フードを固定している大きめのボタンには、ディーバである証として、紋様が描かれている。

いつかイーラがミランに連れられて行った図書室の扉にあったあれだ。

イーラ達が乗り込んだ駅は本部から一番近い事もあり、よくディーバ達が使用するため、政府直属に権限が与えられているのだ。

「おいおい、感謝するなら俺にしろよな。」

ライが呆れたように言った。

このまま人の足で走っていては間に合わない判断したイーラが、
ライを変体コンバートさせたのだ。

一行はライの背に乗り、間に合ったという訳だ。

「ありがとう。ライ。君のおかげだよ。」

「イーラもありがとう。おかげで間に合ったわ。」

「いいの。まにあったからよかった。」

4人は安堵の表情を浮かべる。そして、役目は終えたと言わんばかりに、ライはイーラの中へと還った。赤い光がイーラの胸元に入る。

「さて。ここから目的地のハルベハイコスの町へは、約2時間かかります。ま、話してもしながら、ゆっくりいきましよう。」

あまり広くはない個室に、イアンの声が響いた。

木製の机にふかふかの椅子。そして、動き出した列車の窓の外には、雑木林が過ぎ去っていく。

一番窓側に座っていたイーラは、その景色を見つめながら、こんな事を考えていた。

（あれはなんだっただろう…？）

先日の初任務での出来事、そして飛び込んできた何かの記憶。朦朧とした意識の中、医務室で聞いた謎の声。

《あれは記憶…。あなたの、記憶……。》

（きおく…？わたしの？）

確かにイーラは小さい頃の記憶があまりなかった。覚えているのは、あの子守唄だけ。

イーラは頭の中で曲を奏でた。

$$\left(\begin{array}{cc}) &) \\ + & + \\ \neq & \neq \\ \vdots & \vdots \end{array} \right)$$

そんな時だ。ぼくとしていたイーラは、名前を呼ばれた声で、我に返った。

「イーラさんは？？」

「……っ！えっ？？」

イアンが、イーラに話しかけてきた。

「世界が元に戻ったら、イーラさんは何をしたいですか？」

「せかいが…もとに？」

「はい。」

考えた事も無かった。

それよりも、元に戻った世界なんて、あるのだろうか？

第一、元の世界とはなんなの？

それすらわからなかったイーラには、答えようがなかった。

「わたしは……まだ。」

「じゃあ、これから見つかるというわね。」

隣に座っていたセオが、ニツコリと微笑んだ。

そして車内に音声が響き渡った。

「まもなく、ハルベハイコス。ハルベハイコスです。」

「そろそろですね。行きましょう。」

あつと言う間に時は過ぎ、ハルベハイコスに到着していた。
一行は列車から降り、その景色に目をやった。

そして何よりもおどろきを隠せず、目を奪われたのはイーラだった。

「すごい……！」

「そういえば、イーラさんはハルベハイコスは初めてでしたね。」

「はるべ……はいこそす……。」

目前に広がるのは高層ビルの群れ、そして空間を走行する乗り物の数々だった。ネオンのような光を放ち、楕円形のフォルムをしている。

ハルベハイコスの町は他の町と比べ、格段に科学技術の進んだ町であり、国内有数のビックシティだ。

中でもイーラが目を奪われたのはこれだった。

「あのそらをとんでるのはなんですか？」

「あれは、Hone^{ホーン}と言って、空気による浮遊力を利用した乗り物です。今は小型のタイプが主流ですが、バスのような大きなタイプもあるんですよ。」

今まで小さな田舎町で過ごしてきたイーラにとってここは、全くの別世界だった。

「こんな大きな町、どうやって調査するんでしょう……。」

「アヤさんから、調査表が届いている筈です。」

イアンがポケットから携帯端末を取り出した。
画面をスクロールさせ、あるページで止まる。

そのページには、ハルベハイコスを上から見た地図と、何やら番号が細かく振られていた。

「『C-23』にて調査開始……って書いてあります。」

イアンは両サイドにいるセオとイーラに画面を見せる。

すると自動的に画面が『C-23』の案内を始めた。周りの建物の様子や、有名な場所、主な観光場所やホテルなどの案内を一通り、説明した。

「へえ〜！こんな町に、まだ図書館があるんだ〜！」

セオが興奮気味に言う。

そしてイアンが微笑みながら続く。

「セオは本当に本がすきだね。」

二人の後を追っていたイーラが、周りの景色を見ているうちにあることに気が付いた。

（このかんじ……どこかでおぼえがあるけど……。でも、ここにるのははじめてのはず……。）

イーラは不思議な感覚に包まれながら、二人の後を追った。

後に訪れる不幸があるとも知らずに。

少女は少年の元へと駆けていった。

t o b e c o n t e n e w . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4561w/>

クローク

2012年1月14日15時47分発行